

# 自然保護委員総会（新潟県大会）報告

9月11～12日、平成22年度日山協自然保護委員全国総会が新潟県山岳協会主管の下、新潟県、柏崎市、(株)新潟日报社、(株)新潟放送の後援を得て柏崎市高柳町「じよんのひ村」で開催。全国から130余名の委員が参加、山岳環境保全の諸問題につき白熱した議論が繰り広げられた。

総会に先立ち初めての試みとして「全国自然保護委員長会議」が開かれ、全国横断的なネットワーク作りとともに地域の独自性を活かすべく地区ブロックでの『連絡会』の活性化を図ることが協議された。

新潟山協片桐副会長の開会宣言で開始された総会は、まず主催者側田中会長より指導員をさらに増やし、山の素晴らしさ・自然への心遣いを若い世代に伝えてほしい旨、長谷川自然保護委員長より「事業仕分け」で注目される山のトイレ問題の動向が紹介され日山協として総力をあげて制度存続を働きかけること、10月に開催されるCOP10とも連動し山岳環境保全活動のさらなる広がりを図りたいとの今日的課題が提起された。さらに主管代表遠藤会長より、2度の震災を経て立ち上がった中山間豪雪地帯の棚田から生物多様性に学び、自然保護のために岳人同士力を合わせようとの力強い挨拶、柏崎市長(代理)、新潟県環境企画課より歓迎のご挨拶を頂いた。

議事に入り、まず愛媛総会以降の常任委員会の活動報告(毎月の委員会や研修会等)、山岳団体自然環境連絡会(6団体)が行っている「山の鳥獣目撃レポート」への具体的アクセス方法、現在までの報告状況の説明、さらなる協力依頼に続き、「各都道府県山岳連盟(協会)活動状況等について(情報交換)」に進み、あらかじめ提出された資料に基づいて提案・報告がなされた。

クリーンハイクや自然観察会を通じて、未組織登山者や次代を担う若い世代向けに山の楽しさ・素晴らしさを伝え、山のマナーや山岳環境保全の啓もうを図る活動、登山道整備、間伐や下刈り、植林活動を通じた森作り、稀少野生動物植物の

保護保全活動、水場の水質調査や樹木の立枯れ調査、携帯トイレの普及活動等々、その活動は多岐にわたり、その担い手としての自然保護指導員を増やす取り組みと共に、各岳連が地域の特性に応じて積極的に繰り広げている山を守る諸活動が報告、質疑応答があった。

しかし、こうした旺盛な環境保全意識とは裏腹に、脆弱な活動資金やマンパワーに手詰り感を抱く岳連も決して少なくない。チャーターバスを利用した一極集中的なツアー登山の増加等いわゆるオーバーユースによる登山道の崩壊や沢水の汚染、地球温暖化や森林開発で生息域を変えざるを得ない野生動物が餌場を求め高山あるいは里山に移動、その採食圧による高山植物や農作物あるいは人的な被害の拡大、樹木を枯死させる病害虫の発生、ライフスタイルの変化による里山活性サイクルの崩壊といった「山」環境の悪化は進み、保全活動の継続は一岳連には荷が重い。そうした中、地域ブロックや行政と連携して成果を挙げた事業、各種補助金を受けて事業の継続を図っている活動が報告され、今後の方向性の一つとして大きくクローズアップされた。

次期開催地を鳥取県と決定後、上越教育大学五百川裕準教授により今大会のテーマでもある「里山に息づく生物多様性に学ぼう、水生植物保全から考える棚田の重要性」と題する基調講演があり、本テーマを大会スローガンとして採択した。

翌日は大雨の中、刈羽黒姫山登山と棚田見学の2コースに分かれ、里山に息づく自然を体感した。

最後に、新潟県山岳協会をはじめ、総会を主管・ご後援頂いた関係各位に対し、心より御礼申し上げます。来年また鳥取で！

日山協自然保護常任委員会

小高令子 記



「柏崎市 じよんのび村」総会会場にて

